

須原・「魚のゆりかご水田プロジェクト」-水田の豊かな生物多様性を目指して

せせらぎの郷（須原・魚のゆりかご水田協議会）代表 堀 彰男

<http://seseraginosato.net/>

1. 活動の目的

野洲市須原（旧中主町）は、自然豊かな田園地帯である。しかし、昭和40年代から始まった琵琶湖総合開発により、ほ場整備や湖岸整備が進み、農業の合理化や交通の利便性の向上と引き換えに、昔ながらの琵琶湖や水路・水田が消失し、琵琶湖の固有種であるニゴロブナなどを育む豊かな生態系の仕組みが壊れてしまった。そこで、もう一度、かつての豊かな生態系の仕組みを取り戻すため、「魚のゆりかご水田プロジェクト」に取り組み、地域ぐるみで生物多様性に配慮した農業に取り組むことにした。また、「生きもの観察会」や「農業体験」などによる都市住民との交流や学校・企業等との連携、米・湖魚などの伝統食や伝統文化の継承、農業後継者の育成推進などにより、先人の残した貴重な財産である須原の地域資源を後世へ伝え、地域活性化を図る。



「魚のゆりかご水田風景」

2. 活動の内容

「魚のゆりかご水田プロジェクト」とは、魚の産卵場所としての田んぼの機能を取り戻すため、排水路に階段状に堰上げた魚道を設置し、魚が田んぼに遡上しやすい環境を整え、琵琶湖と田んぼとの連続性を確保することで、琵琶湖の固有種であるニゴロブナなどの生育環境を守り、生物多様性へ配慮した環境保全型の農業を実践するプロジェクトである。また、せせらぎの郷では、体験型イベントの実施を基本とした都市住民との交流、地域ブランド作りによる6次産業化にも取り組んでいる。下記は、活動例とその詳細である。

・田んぼオーナー制の導入：魚のゆりかご水田のお米、区画保証及び各イベントへの優待により、お米作りの大切さ、生物多様性の魅力を伝

え、活動への理解・支援を得る。

- ・田植え体験：地域住民と参加者が手作業で一つ一つ苗を植えていく。
- ・稲刈り体験：地域住民と参加者が一体となって稲を手刈りし、刈った稲ははさがけにする。
- ・生きもの観察会：魚道ですくすく育った様々な種類の魚たちを参加者に観察してもらい、生物多様性の意義を伝える。参加者は、毎回150～200名程度になる。
- ・湖魚を食べる会：滋賀県の伝統料理、鮒寿司や佃煮を作って食べることで地域交流を深める。
- ・琵琶湖の環境と魚のゆりかご水田の体験ツアー：都市住民や都会の子どもたちを対象とした体験型ツアー。
- ・小学校出前講座：学校給食で「魚のゆりかご水田米」を食べてもらいながら講話を行う。
- ・各大学の研修受入：実際に生きものに触れ、生きものの成育状況を確認する生きもの観察会と地域活動などをテーマとした講演会を開催している。また、奈良女子大学などへの出前講座も実施している。
- ・生きもの命のゆりかご講座：イベント湖岸域の農業（田んぼ）と琵琶湖との関係性、生きもの保全、食文化への興味・理解の推進等についての体系的な講座を行っている。
- ・農業インターンシップの実施：農業後継者育成のため、農業に興味を持つ学生を主な対象として、田植え作業、溝切り作業、畦草刈り作業、大豆の播種作業等の農業体験を行っている。
- ・都市へのPR活動：東京都・八王子市、大阪府・吹田市で開催された、収穫感謝祭及び東京エコプロダクツ2012、2013へ出展し、生物多様性に関心を持つ多くの方々に「魚のゆりかご水田」のPRを行った。



魚の観察会の様子

3. 6次産業化に向けた取組

平成 25 年 12 月、地域住民が協力し、平成 25 年産「魚のゆりかご水田米」(コシヒカリ 100%) によるお酒づくりを始動した。ネーミングや P R 方法など、さまざまな課題の検討を重ねた結果、純米吟醸酒「月夜のゆりかご」が誕生し、4 月に販売を開始した。地域の皆さんの P R 活動が成功し、非常に飲みやすく、美味しいお酒として好評を得て、発売早々に完売となった。また、地域の自酒としての話題が広がり、興味・関心を抱いた人の輪と交流が広がりつつある。また、平成 26 年度「ココール マザーレイク・セレクション 2014」に選定され、滋賀県の名産として認定を受けたことで、全国へ P R が行われるため、今後の販売に大いに期待が高まる。今後も「月夜のゆりかご」とともに、更なる「魚のゆりかご水田米」のブランド化と販路拡大を目指すと同時に、地域集落と都市住民との活気ある交流や地域活性化に結びつけたい。



「月夜のゆりかご」

4. 「魚のゆりかご水田」世界に

生物多様性条約第 12 回締約会議 (COP12) が平成 26 年 10 月 6 日～17 日まで、162 の締約国、約 3,000 人以上の参加者のもと、韓国 平昌において開催された。この国際会議のサイドイベントに「せせらぎの郷」が参加し、琵琶湖の保全とともに、湖魚が産卵・成育できる水田環境の再生に取り組む「魚のゆりかご水田」の取組について発表した。会場には、開催地である韓国をはじめ、台湾、アフリカ、ブラジル、モンゴルの政府関係者や大学教授、研究者、日本からは、環境省、国際連合大学、ラムサールネットワークなど N G O の方々など多数の方々にお集まりいただいた。発表では、我々

の活動が、2010 年に名古屋での開催の COP10 で採択された愛知ターゲットの 20 項目の一部である、魚毒性の低い除草剤を使用し、化学肥料を最小限にとどめるなど、持続的に環境に配慮した取組をしていることなどを説明し、生物多様性に配慮した環境保全型農業を展開しつつ、農業者だけでなく幅広く多様な人々と協働しつつ活動していることをアピールした。発表の後の質疑応答では、台湾の大学教授から琵琶湖の保全のために取り組む滋賀県の施策や環境を守る米づくりに関心をもたれ、収穫量の違いなどについても尋ねられたほか、参加者の方々と活発な意見交換が出来た。また、田んぼでの生き物保全に取り組んでいる韓国農業者の方々との交流も芽生えるなど、今回の COP12 が単に活動発表の場だけでなく、新たな交流が生まれ、さらにグローバルな視点で展開していく可能性が広がった。



COP12 全体会議場の様子

5. 今後の計画

この活動を持続可能な取組にするためには、環境と経済の両立を目指す必要がある。「魚のゆりかご水田米」及び「月夜のゆりかご」のブランド力の向上、農商工連携への展開など、高付加価値の商品販売を考えていきたい。活動支援者となる田んぼオーナー数を増やすことも重要課題であり、都市への P R を一層進めていきたい。また、近年、韓国など海外からの視察や交流も始まってきたことから、将来的には海外に向けての発信も視野に入れた展開を考えていきたい。その他、都市農村交流ツアーなどによる集客を図り、地域活性化につなげることを目指して研究に取り組んでいく。